

第Ⅵ章 総 括

1 遺跡の全容

大湯環状列石はこれまで幾度も発掘調査が行われ、全体の遺構配置はほぼ判明している。

遺跡を構成する遺構は、環状列石、配石遺構、環状配石遺構、土坑墓、フラスコ状土坑、遺物集中域などの多くの遺構である。

遺跡の主体は、野中堂と万座の二つの環状列石である。この環状列石を中心に掘立柱建物跡、土坑墓、フラスコ状土坑が同心円状に分布し、さらに遺物集中域が広がる。また、万座北側地区に環状に配置された掘立柱建物群や居住域 a 群に伴った遺物集中域が領域をつくり、遺構と遺物はこの 3 地区に集中する。このほか、万座西側地区の台地縁や野中堂地区に小規模な居住域、万座北側地区に環状配石遺構群(a 群・b 群)、万座南側・同北側地区にフラスコ状土坑群、一本木後口地区や野中堂南側・万座南側地区に配石遺構群等が構築されている。

検出された主な遺構

①環状列石

野中堂環状列石と万座環状列石の二つが存在する。いずれも配石遺構で構成され、円環状に配置される。各々の環状列石の中心から北西側に「日時計状組石」が造られ、野中堂環状列石では内帯寄りに、万座環状列石は外帯寄りに構築される。列石の各々の中心と日時計状組石はほぼ一直線に並び、その配置に規則性があったことが看取される。

二つの環状列石の形態は類似するが、違いも持ち合わせている。

ア 野中堂環状列石

内帯・外帯及び出入口状施設によって構成される。内帯・外帯において円環構造の基本となる配石遺構(石列)を確認した。

内帯は、縦横並べの配石 D1 類が円環状に配置され、その外周に沿って配石 A1 類・C 類が配置される。外帯の西側にも連続して立て並べた配石 D2 類が断続してみられ、その延長は南側や北側の出入口状施設まで連なっている。外帯の配石遺構は内帯と同様に配石 D2 類が円環状の基本となり、その外周に沿って配石 A 類から C 類が配置されるが、万座環状列石のように密集した配置とならず、列的な配置を示す。

未調査地区があるため、環状列石周辺の全体的な遺構配置は明らかでないが、万座環状列石と同様に、環状列石を中心に掘立柱建物跡・土坑墓・フラスコ状土坑が同心円状に分布し、それを囲むように遺物集中域が広がる。遺物集中域は外帯から約 25m 幅で円環状に広がり、特に列石の北東側と南側の遺物密度が高い。

国営調査時の配石遺構下部の実測図や記録写真によると、配石下部土坑に接して、内帯・外帯間にピットが記録されており、列石内にピットが存在していた可能性がある。

イ 万座環状列石

内帯・外帯及び出入口状施設によって構成される。野中堂環状列石で検出された内帯・外帯の基本となる輪郭状の配石 D1 類は確認できない。内帯は配石 A2 類が連続して円環を描くように配置される。この内帯西側の配石遺構上に長さ 1m を超える大型の 6 個の石が横倒しとなっている。これらの基部を結ぶと等間隔・一直線に並ぶ配石 D4 類となり、その並びは東西を向く。

外帯は、4 基～27 基の配石遺構が集まり小さな群となり、それらが空白域を持ちながら円環状に配置される。内帯と外帯を繋ぐ平置き配石 D5 類、出入口状施設とした外帯から伸びる二列一対の配石 D2 類がほぼ東西南北の 4 方向に付設されている。

環状列石を中心に掘立柱建物跡、土坑墓、フラスコ状土坑が同心円状に分布し、その外周に約 25m 幅で遺物集中域が広がる。掘立柱建物跡、土坑墓、フラスコ状土坑は環状列石の西側に、遺物は列石の東側や西側から多量に検出・出土する。

ウ 構築材

使用される石材は 17 種である。石英閃緑玢岩が全体の約 60%、安山岩が約 30%を占める。

藤本の結果から、石英閃緑玢岩の岩体は諸助山に求められ、その採取地域は大きさや円磨度から大湯川と安久谷川の合流地点より下流で採取された可能性が高いことが判明した。また、環状列石の構築材として、石英閃緑玢岩は柱状のものを、安山岩は扁平なものが多く用いられる傾向がある。

エ 構築時期

野中堂・万座(環状列石)地区の遺物集中域、環状列石に関連する土坑墓・フラスコ状土坑の出土土器から、野中堂環状列石とそれに関連する遺構の構築時期は十腰内Ⅰ式古段階に、万座環状列石とそれに関連する遺構は十腰内Ⅰ式古～新段階にかけて構築されたものと考えられる。

放射性炭素年代(AMS 測定)では、試料 25 点(第 13 表)は $4160 \pm 30\text{yrBP}$ ～ $3460 \pm 30\text{yrBP}$ の間にあり、特に $3780 \pm 30\text{yrBP}$ ～ $3460 \pm 30\text{yrBP}$ の間にまとまっている。また、第 14 表・15 表の暦年較正年代からは試料 26 点中 23 点は、最も古い No.2 が $4227 \sim 4093\text{calBP}$ の間に 4 つの範囲に、最も新しい No.18 が $3821 \sim 3648\text{calBP}$ の間に 4 つの範囲で示されている。第Ⅲ群 3 類土器(十腰内Ⅰ式古段階)から同 6 類土器(十腰内Ⅱ式・Ⅲ式)がこの範疇に収まる。

②環状列石以外の遺構

ア 環状・方形配石遺構

万座地区と同北側地区で検出した。万座 a 群と同 b 群に分けられ、万座 a 群は万座地区と同北側地区の境界付近に位置し、張出部を内側に向けて () 状に配置される。同 b 群は台地縁を意識した配置を示し、この二つの群を大きく取り囲むように遺物集中域が存在する。

万座北側地区 SX(S)04 とした環状配石遺構は、大規模で二重の柱配置、石囲炉の数からこの種の遺構の中でも特異なものと考えられる。石囲炉や地床炉、柱穴を検出したことから上屋を持つ建物跡と考えられるが、東北南部・関東地方で検出される敷石住居や柄鏡形住居との関連性が指摘されており、性格については「祭祀的な要素の強い遺構」としたが検討が必要である。

環状列石に隣接するものは、掘立柱建物跡や土坑等と重複し、本遺構が新しい。

構築時期は、重複関係や遺構内出土遺物から後期中葉(十腰内Ⅱ式・Ⅲ式)と考えられる。下内野Ⅲ遺跡では十腰内Ⅰ式古段階の土器を共伴しており、性格とともに初現時期の検討が必要である。

イ 配石遺構群

一本木後口配石遺構群

史跡指定地の東側で検出した。配石遺構 57 基で構成され、配石群 a と b の二群に分けられる。

配石群 a は弧状列石(配石 D5 類)を挟み、外帯と内帯に区画され、弧状列石を含めて三重の弧状を示す。外帯は配石 A2・2 類が等間隔に配置され、内帯には外帯配石に対峙する位置に数基から構成された配石群が位置する。

配石下に土坑を持ち、人為に埋め戻され、土器棺や副葬品と考えられる石鏃、漆塗木製品が出土したものがあることからこれらを「配石墓」と判断した。

配石群 b は、配石群 a の野中堂環状列石寄りに位置する。配石遺構 13 基からなる配石遺構群で、弧状や環状配置を示さない。配石下部から土坑を検出したものがあることから「配石墓」と考えられる。

構築時期は、遺構内及び周辺出土土器から、配石群 a・b とも第Ⅳ期(十腰内Ⅰ式新段階)と考えられる。

その他の配石遺構群

野中堂配石遺構群、万座配石遺構群を検出した。

野中堂配石遺構群(第 42 図)は、野中堂環状列石の南側出入口施設の延長線上に位置する配石遺構 6 基と、さらに南側に位置する配石遺構 4 基から構成される。配石下に土坑を持つものや土器棺が出土したものがあることから、配石墓(群)と考えられる。構築時期は、出土遺物から野中堂環状列石と同じ第Ⅲ期(十腰内Ⅰ式古段階)と考えられる。

万座配石遺構群は、万座環状列石の南側出入口状施設の延長線上に位置する。配石遺構 5 基で構成される。形態は A2-3 類で、下部に人為的に埋め戻された土坑を有することから配石墓(群)と考えられる。構築時期は出土遺物から第Ⅳ期(十腰内Ⅰ式新段階)と考えられる。

ウ 掘立柱建物跡

野中堂(環状列石)地区、万座(環状列石)地区、万座北側地区で検出した。

野中堂環状列石、万座環状列石の外周に分布する掘立柱建物跡については第Ⅴ章(2)④のとおりである。両環状列石の外周の掘立柱建物跡は建物跡Ⅰ類・Ⅱ類が主体となり、建物跡Ⅱ類は同心円配置の内側に、Ⅰ類建物跡は外側に配置され、建物跡Ⅵ類～Ⅸ類が混在する。

構築時期は、建物長軸が環状列石を意識した配置を示すこと、環状列石に関連する遺構や遺物集中域の出土土器から、環状列石と同時期の十腰内Ⅰ式古～新段階と考えられる。

万座北側地区の掘立柱建物跡は、建物跡Ⅱ類が長軸を連結するように、直径約 50m の環状に配置され、南東部には建物跡Ⅰ類が配置される。建物跡柱穴からⅢ群 3 類・4 類土器が出土していることから、構築時期は十腰内Ⅰ式古～新段階と考えられる。

岩手県西田遺跡の分析からモガリ屋的な性格としてきたが、貯蔵庫・平地式住居等とする論考がある。また、掘立柱建物跡Ⅵ類～Ⅸ類は、確認時、石囲炉や地床炉が伴わなかったことから掘立柱建物跡と判断したが、その形態が平地式の堅穴建物跡に類似すること、これまでの論考を踏まえ、検討が必要な遺構である。

エ 堅穴住居跡

万座北側地区(居住域 a 群)、同西側地区(居住域 b 群)と野中堂地区に小規模な居住域を検出した。平面形は円形を呈し、径 2.7m～5.0m を測る。掘り込みは浅く、中央に石囲炉または地床炉で壁際に「コ」字状の石組を持つ。市内で検出された後期前葉～中葉にかけての住居跡と共通した形態と特徴を持つが、中葉のものは赤坂 B 遺跡のものと比較し、小型である。

構築時期は、居住域 a 群は十腰内Ⅰ式古段階、居住域 b 群は十腰内Ⅰ式古～新段階・十腰内Ⅱ式、野中堂地区は十腰内Ⅱ式である。

オ 石囲炉

万座北側地区に分布する。形態・規模は住居跡内の石囲炉と変わらない。

石囲炉は、台地西側から入り込む沢地を境に南北の二群に分けられる。本遺跡から掘り込み

の浅い住居跡が検出されていることを考慮すると、平地式の住居跡の可能性もあり、位置関係と合わせ検討が必要である。構築時期は十腰内Ⅰ式古～新段階、第Ⅲ群 5 類と考えられる。

カ 土器埋設炉

万座北側地区に集中する。単独で検出された。万座北側地区北端の 2 基は微高地に構築され、Ⅲ群 2 類土器が埋設される。北端に位置する 2 例以外は、土坑(墓)、フラスコ状土坑の分布域に混在して検出された。これらの構築時期は後期前葉と考えられる。

キ 土坑

野中堂(環状列石)地区、万座(環状列石)地区、万座北側地区の密度が高い。

平面形は楕円形・円形・方形を呈し、完形・復元土器、土・石製品を出土するものがある。

野中堂地区、万座地区の土坑は、環状列石を中心に分布する掘立柱建物跡の外側にフラスコ状土坑と混在しながら同心円状に分布する。

万座地区では西側に分布密度が濃く、数基からなる群を構成し、列石外帯と対応する可能性がある。楕円形のものは、長軸方向を環状列石に向けた配置を示し、堆積土が人為であることから土坑墓と考えられる。また、円形・方形のものも環状列石を中心した遺構の同心円配置内にあり、屈葬可能な規模で、人為堆積であることから土坑墓と考えられる。

また、万座北側地区の土坑は、人為的に埋め戻され、遺構内から土製品・石製品が出土するものがあることから土坑墓と考えられる。

構築時期は、野中堂・万座地区のものは環状列石と同時期、万座北側地区は十腰内Ⅰ式新段階と考えられるが、数例であるが十腰内Ⅱ式と判断したものもある。

ク フラスコ状土坑

野中堂(環状列石)地区、万座(環状列石)地区、万座北側地区の密度が高い。万座北側地区と同南側地区には微高地を利用し、十数基を密集・構築している。

野中堂地区、万座地区では、各々の環状列石を中心に土坑と混在しながら同心円状に分布するが、土坑のように群としてまとまるような構成は見られない。

遺物の出土量が最も多い遺構である。炭化堅果類が出土したものがあることから貯蔵施設と考えられるが、形態が歪なものや浅いものがあり、土坑底面から赤色顔料を塗布した土器が出土した例があることから、墓坑としてつくられたものや転用されたものが含まれている。

構築時期は、野中堂地区・万座地区に位置するものは環状列石と同時期の十腰内Ⅰ式古・新段階に、万座北側地区にはⅢ群 5 類土器～十腰内Ⅱ式の時期のものが見受けられる。

ケ 遺物集中域

野中堂(環状列石)地区、万座(環状列石)地区、万座北側地区に遺物の集中範囲が見られる。この 3 地区で遺物全体の 9 割以上が出土している。

この集中域は、野中堂地区・万座地区では環状列石と関連する遺構群の外側に、万座北側地区では環状に配置された掘立柱建物跡群、環状配石遺構群(万座 a 群・b 群)の外側に認められる。

野中堂・万座地区の遺物集中域からは十腰内Ⅰ式古・新段階(第Ⅲ群 3 類・4 類土器)土器、万座北側地区の遺物集中域からは十腰内Ⅰ式古段階～十腰内Ⅱ式・Ⅲ式(第Ⅲ群 3 類～同 6 類)土器が出土している。

石鏃・搔器、土器片利用土製品は遺構密集地内から満遍なく出土する一方、三脚石器、有孔土製品・キノコ形土製品等は万座地区や万座北側地区に偏在する。

2 遺跡の変遷

- 第Ⅰ期**… Ⅲ群 1 類土器、後期初頭の日廻岱遺跡Ⅳ群 b 類・c 類土器、陸奥大木系土器第Ⅲ段階に相当する。この時期の遺構は検出していない。
- 第Ⅱ期**… Ⅲ群 2 類土器、後期前葉の蛭沢式土器段階に相当する。T ピットが大湯川を望む台地縁や沢状地形の沢頭に規則的につくられるほか、小規模な群を構成して史跡指定地内・外に分布する。万座北側地区台地縁の微高地には土器埋設炉がつくられる。
- 第Ⅲ期**… Ⅲ群 3 類土器、後期前葉の十腰内Ⅰ式古段階に相当する。遺構・遺物が飛躍的に多くなる。野中堂環状列石や万座環状列石を中心に掘立柱建物跡・土坑墓・フラスコ状土坑、遺物集中域が広がる。万座北側地区・同西側地区台地縁に小規模な居住域(a 群・b 群)が営まれる。万座環状列石と居住域 a 群の間に位置する環状に配置された掘立柱建物跡群や多数の石囲炉を大きく取り囲む遺物集中域がつくられる。また、野中堂環状列石の南側に配石遺構(墓)群がつくられ、この時期に墓域が形成され、発展する。
- 第Ⅳ期**… Ⅲ群 4 群土器、後期前葉の十腰内Ⅰ式新段階に相当する。第Ⅲ期と同様に、野中堂環状列石や万座環状列石を中心に掘立柱建物跡・土坑・フラスコ状土坑、遺物集中域が広がる。万座西側地区の居住域は第Ⅲ期から継続した可能性がある。また、万座北側地区や同南側地区にフラスコ状土坑群がつくられ、万座南側地区や野中堂環状列石東側に一本木後口配石遺構群(配石墓群)がつくられ、墓域が拡大する時期である。
- 第Ⅴ期**… Ⅲ群 5 類土器、後期前葉から中葉の端境期に相当する。万座地区・同北側地区に土坑やフラスコ状土坑が構築されるが、その数は少ない。この時期に環状列石の造営は途絶え、それに合わせ墓域の形成が止まる。
- 第Ⅵ期**… Ⅲ群 6 類土器、後期中葉の十腰内Ⅱ式・Ⅲ式土器に相当する時期である。万座地区、同北側地区に環状配石遺構や方形配石遺構が構築される。万座 b 群の環状配石遺構は重複関係から大型から小型へと移り替わる。環状配石遺構群に伴う土坑やフラスコ状土坑

第 34 表 遺跡の変遷

大湯各期	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	第Ⅴ期	第Ⅵ期
大湯Ⅲ群土器分類	Ⅲ群 1 類	Ⅲ群 2 類	Ⅲ群 3 類	Ⅲ群 4 類	Ⅲ群 5 類	Ⅲ群 6 類
根本編年	第Ⅰ様式	第Ⅱ・Ⅲ様式	第Ⅳ様式	第Ⅴ様式	第Ⅵ様式	
土器型式	日廻岱Ⅳ群 b 類・c 類	蛭沢式	十腰内Ⅰ古	十腰内Ⅰ新	居熊井Ⅲ 1e	十腰内Ⅱ・Ⅲ
主な遺構						
環状列石 (万座環状列石)					*****	*****
環状配石遺構 (野中堂環状列石)					*****	*****
環状配石遺構 (万座北側地区 a 群)					*****	*****
環状配石遺構 (万座北側地区 b 群)					*****	*****
配石遺構群 (万座配石遺構群)						
配石遺構群 (野中堂配石遺構群)						
配石遺構群 (一本木後口配石遺構群)						
掘立柱建物跡 (万座地区)					****	
掘立柱建物跡 (野中堂地区)					****	
竪穴住居跡 (万座北側地区)						
竪穴住居跡 (万座北側地区 a 群)						
竪穴住居跡 (万座西側地区 b 群)						
竪穴住居跡 (野中堂地区)						
石囲炉						
土器埋設炉						
T ピット						
土坑 (万座地区)					*****	
土坑 (野中堂地区)					*****	
土坑 (万座北側地区)					*****	
フラスコ状土坑 (万座地区)						
フラスコ状土坑 (野中堂地区)						
フラスコ状土坑 (万座北側地区)						

濃い緑：遺構が存在する時期 薄い緑：主体とならないが遺構が存在する時期 破線：遺構の存在が想定される時期
根本が設定した編年については『総覧 縄文土器』を参考にした。

がつくられるがⅢ期・Ⅳ期と比較すると遺構数は減少する。遺物集中域はこの環状配石遺構群(a群・b群)を取り囲んで広がるが、その出土量は第Ⅲ期・Ⅳ期と比べ減少する。

3 周辺遺跡からみる大湯環状列石の位置付け

市内には、縄文時代早期から江戸時代までの420以上の単独遺跡・複合遺跡が分布する。これらは第4図～8図に示したように、米代川や大湯川その支流によって形成された舌状台地や段丘上に立地する。

縄文草創期の遺跡は、爪形文土器を出土した八幡平地区の飛鳥平遺跡がある。早期は、大湯環状列石の立地する中港台地先端に営まれた物見坂Ⅲ遺跡である。前期では円筒下層土器が出土した清水向遺跡が、中期では中葉～後葉の大規模な集落跡として天戸森遺跡がある。後期に至ると遺跡は小型化し、鹿角盆地全域(第7図)に広がる傾向がみられ、前葉の遺跡として居熊井遺跡や赤坂A遺跡、中葉の赤坂B遺跡がある。晩期には玉内遺跡、柏崎館跡等があるが遺跡数は減少する傾向にある。

大湯環状列石周辺、中港台地及び大湯川、豊真木沢川流域では、早期中葉～前期前葉に物見坂Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、前期後葉は小清水遺跡、中期中葉～後葉は大湯川を挟んだ段丘に下内野Ⅱ遺跡や黒森山麓竪穴群が営まれる。後期前葉は中港台地基部に小清水遺跡、台地ほぼ中央に申ヶ野Ⅴ遺跡、大湯川を挟んだ段丘に下内野Ⅲ遺跡が認められる。後期後葉～晩期は豊真木沢川対岸の台地に丸館Ⅳ遺跡や草木A遺跡があり、石囲炉や遺物が検出・出土している。これらは断片的な調査のため各遺跡の様相は不明だが、時期毎に遺跡の占地に違いが見られる。特に中港台地は顕著で、台地基部や先端部からは複数の遺跡が確認されているが、中央部は大湯環状列石のみとあってよい。環状列石構築直前は狩猟の場として利用しているが、それ以上の活用がみられない。このことが環状列石構築の場として選定された要因とも考えることができる。

鹿角盆地における配石遺構は、中期中葉～後葉の天戸森遺跡で、弧状配置の配石遺構群が台地北側の斜面から確認されている。後期前葉には下砂沢遺跡や小坂環状列石墳墓、大岱Ⅱ遺跡等の類例が増え、晩期前葉の玉内遺跡まで確認でき、いずれも台地縁や丘陵部に占地する。後期前葉の配石遺構は、上記のほか駒林遺跡、案内Ⅰ遺跡、下内野Ⅱ遺跡等であるが、大規模な配石遺構群(環状列石)は大湯環状列石と高屋館跡以外に認められない。

大湯環状列石と高屋館跡は南北に細長い盆地の北寄り、大湯川・米代川・小坂川が合流する地点に延びる台地に立地している。鹿角盆地の後期前葉の遺跡等の在り方や、配石遺構の密集度から、両遺跡は地域の拠点的存在だったと考えられ。その関連性は地理的な位置付け等から盆地全体に及んだと想定され、河川は当時の領域を区画する境界として、さらに領域間・遺跡間の主要な交通経路だったとも考えられ、大湯環状列石にはこれらの河川を活用し、アスファルト塊や翡翠が持ち込まれている。

両遺跡の遺構・遺物の量や土器の特徴、周辺遺跡の密度から、高屋館跡は同時期の遺跡が少ないという要因があり、比較的短い期間に場の利用が途絶えるが、大湯環状列石は大湯川流域さらに広範囲に分布する周辺の小規模な集落と関連しながら、長期に渡って地域の拠点として存在していったものと考えられる。

4 大湯環状列石とは

大湯環状列石は、後期前葉～中葉に造られた野中堂環状列石と万座環状列石を主体とした遺

跡である。

後期前葉、二つの環状列石を中心に掘立柱建物跡、土坑墓、フラスコ状土坑、遺物集中域が広がり、万座環状列石北側や西側台地縁に小規模な居住域が営まれる。さらに各環状列石に伴い大規模又は小規模な配石墓群(一本木後口配石遺構群や野中堂配石遺構群等)が形成され、墓域が拡大する、万座環状列石北側に環状に配置した掘立柱建物跡群とこれを取り囲む遺物集中域をつくり、領域も拡大していく。

後期中葉、二つの環状列石(墓域)とこれらに伴った配石墓群の造営は途絶え、万座北側地区に環状配石遺構群(a群・b群)、土坑、フラスコ状土坑、遺物集中域で構成された領域と、万座環状列石西側台地縁や野中堂地区に小規模な居住域をもった遺跡へと変化していく。

大湯環状列石の性格については、国営調査時に墳墓説(墓域)、祭祀の場とする説が提示されていた。二つの環状列石については、一本木後口配石遺構群の調査結果から配石墓群として考えているが、環状列石の外周に分布する掘立柱建物跡をモガリの場、祭壇、貯蔵庫、平地式住居等とする論考、さらに環状配石遺構を敷石住居の系譜とする論考も提示され、このような研究過程の中で、大湯環状列石を「墓域・祭祀の場」と解釈するより、「居住域、貯蔵域、廃棄域、墓域、祭祀域が認められることから、遺跡全体を集落として捉え、その中でも墓域・祭祀域が発展した遺跡」と解釈する鈴木克彦(文献 170)、阿部昭典(文献 204)等の論考もある。

これまでの調査、本編でも性格に関する結論を導きだせなかったが、今回提示した環状列石の配石構成図や遺物分布図、遺跡の変遷等の資料提示は、遺跡全体の性格を考察していくうえで、今後の大湯環状列石の研究に大きな役割を果たしてくれるものと思う。

縄文後期前葉は、縄文時代のなかでも大きな転換期であったと考えられている。東日本において、中期までに営まれた拠点集落の多くが小規模化していく中で、大規模な環状列石や敷石住居等これまで見られなかった施設が出現する。鹿角盆地でも同じ状況が見られ、中期の大規模な集落である天戸森遺跡以降の後期前葉～中葉の集落跡は、居熊井遺跡や赤坂B遺跡のように住居数が少なく、存続期間が短いものが多く、この状況は晩期まで続く。前節で述べたように、鹿角盆地における後期前葉期の拠点と考えられる大湯環状列石は、小規模な集落が分散する中で、これらの集落と関連しながら中心的な役割を果たしたものと考えられる。

環状列石は、前期に中部地方・関東地方を中心に出現するが、時間の経過とともに次第にその姿を消していくが、後期前葉の東北北部や北海道南部に湯舟沢遺跡、伊勢堂岱遺跡、高屋館跡、太師森遺跡、小牧野遺跡、鷺ノ木遺跡等の大規模な環状列石が出現する。後期中葉以降一時期途絶えるが、晩期の大森勝山遺跡に引き継がれる。

環状列石を構成する遺構は配石遺構(石列を含む)であり、配石遺構が主体となった太師森遺跡、石列を主体にした伊勢堂岱遺跡や小牧野遺跡、両者を組み合わせた大湯環状列石がある。これらの環状列石は単基で発見されたものが多く、大湯環状列石の2基、伊勢堂岱遺跡の4基は特異な例といえる。さらに環状列石は掘立柱建物跡、土坑、フラスコ状土坑、竪穴住居跡、竪穴墓坑等を組み込みながら領域(遺跡)をつくっていく。単基の場合は環状列石に伴う遺構・遺物の種類、数量とも少なくなる傾向にあるが、大湯環状列石、伊勢堂岱遺跡は掘立柱建物跡をはじめとする多種の遺構と遺物を組み込み、領域を形成するという共通要素を持っている。

特に環状列石と掘立柱建物跡の組み合わせは米代川流域に分布する環状列石の特徴であり、他地区の環状列石との相違点でもある。しかも同じ米代川流域でも、中流域と上流域の相違点はみられ、顕著な例として、同心円状の遺構配置と居住域の存在である。

大湯環状列石関係文献目録

論文名・書籍名・参考文献

文献No.

昭和 6年(1931年)

- 1 武藤一郎「鹿角郡大湯町に於ける遺跡の研究」『秋田考古会々誌』2－5

昭和21年(1946年)

- 2 甲野 勇「巨石遺物」『科学朝日』第6巻第12号

昭和22年(1947年)

- 3 甲野 勇「ストーン・サークル後記」『科学朝日』第7巻第11号
4 甲野 勇「大湯だより」『あんとろぼす』第2巻第1号
甲野 勇「大湯の巨石遺構」『旅』

昭和23年(1948年)

- 5 甲野 勇「秋田県大湯の巨石遺跡」『民族学研究』第12巻第4号

昭和28年(1953年)

- 6 文化財保護委員会『大湯町環状列石』

昭和31年(1956年)

- 7 川口重一「大湯環状列石の配置」『郷土文化』第11巻第1号
8 川口重一「大湯町環状列石の配置の意義」『国大考古学会報』第41号 6頁

昭和32年(1958年)

- 9 長野県教育委員会『上原』 上原遺跡調査会

昭和34年(1959年)

- 10 駒井和愛『音江 北海道環状列石の研究』 慶友社

昭和41年(1966年)

- 11 内藤博夫「秋田県米代川流域の第四火山屑物と段丘地形」『地理学評論Vol 39』

昭和43年(1968年)

- 12 阿部義平「配石墓の成立」『考古学雑誌』54巻1号
13 水野正好「環状組石墓群の意味するもの」『信濃』第20巻第4号

昭和44年(1969年)

- 14 小坂町教育委員会『小坂環状列石墳墓』

昭和45年(1970年)

- 15 内藤博夫「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論Vol 43』

昭和46年(1971年)

- 16 江坂輝彌「縄文時代の配石遺構について」『北奥古代文化』第3号
17 奥山 潤「秋田県北鹿地方の縄文配石墳墓」『北奥古代文化』第3号
18 斎藤 忠「大湯環状列石と日本の縄文時代の類似遺跡について」『北奥古代文化』第3号

昭和48年(1973年)

- 19 諏訪富多『特別史跡大湯環状列石発掘史』大湯郷土研究会
20 吉田富夫「環状列石遺蹟の標式的形式を具備」 文献19に収録

昭和49年(1974年)

- 21 秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』
22 斎藤 忠1「配石遺構とは何か何のためにつくられたのか」
『日本考古学の視点 上巻』日本書籍株式会社

昭和50年(1975年)

- 23 浅井末吉『遺蹟巡礼日記』大湯郷土研究会
24 安保 彰『小坂のあけぼの』
25 秋田県教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概要』
26 諏訪富多『大湯の歴史(其の一)』

昭和51年(1976年)

- 27 林 謙作「縄文期の集落をどうとらえるか」『考古学研究』第26巻第3号
28 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡概要』

昭和52年(1977年)

- 29 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書』
30 林 謙作「縄文期の葬制・第Ⅱ部」『考古学雑誌』第63巻第3号
31 辻誠一郎「秋田県玉川温泉地域の沖積世鹿湯層の花粉分析」『東北地理29－3』
32 斎藤 忠「日本における再葬(洗骨葬)の展開」『大正大学研究紀要』

昭和53年(1978年)

- 33 富樫泰時「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『ドルメン』
34 鹿角市・鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石保存管理計画書』

昭和54年(1979年)

- 35 葛西 勵「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号
36 林 謙作「縄文期の集落をどうとらえるか」『考古学研究』第26巻第3号

昭和55年(1980年)

- 37 林 謙作「東日本縄文期葬制の変遷(予察)」『人類学雑誌』第88巻
38 岩手県教育委員会『西田遺跡』

昭和56年(1981年)

- 39 成田滋彦「青森県の土器」『縄文文化の研究4』雄山閣

昭和57年(1982年)

- 40 大里勝蔵・秋元信夫他「縄文時代」『鹿角市史』鹿角市

昭和58年(1983年)

- 41 阿部義平「配石」『縄文文化の研究9』雄山閣

- 42 上野佳也『縄文人のこころ』日本書籍
- 昭和59年(1984年)**
- 43 鈴木保彦「集落の構成」『季刊考古学』第7号 雄山閣
- 44 林 謙作「縄文集落 集落論の新しい出発をめざして」第7号 雄山閣
- 45 水野正好「ストーンサークルの意義」『季刊考古学』第9号 雄山閣
- 46 上野佳也「配石遺構についての一考察」『古代文化』25
- 昭和60年(1985年)**
- 47 江坂輝彌「配石遺構とは」『考古学ジャーナル』No254 ニュー・サイエンス社
- 48 斉藤 忠「配石遺構一特に環状列石について」No254 ニュー・サイエンス社
- 49 富樫泰時「大湯環状列石研究史と今後の課題」『よねしろ考古』第1号
- 50 富樫泰時「日本の古代遺跡 24 秋田県」保育者
- 51 村田文夫「縄文集落」考古学ライブラリー18 ニュー・サイエンス社
- 52 本間 宏「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第1号
- 53 秋元信夫「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告」『よねしろ考古』第1号
- 54 上野佳也『日本先史時代の精神文化』学生社
- 55 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)』
- 昭和61年(1986年)**
- 56 阿部義平「日時計の考察一大湯環状列石の配石類型の意味一」『よねしろ考古』第2号
- 57 秋元信夫「秋田県の配石遺構」『よねしろ考古』第2号
- 58 林 謙作「マツリと記念物」『発掘が語る日本史Ⅰ』新人物往来社
- 59 鹿角市教育委員会『大湯環状列石発掘調査報告書(2)』
- 昭和62年(1987年)**
- 60 村越 潔「北東北の葬制」『よねしろ考古』第3号
- 61 富樫泰時「大湯環状列石研究史と今後の課題(2)」『よねしろ考古』第3号
- 62 本間 宏「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」『よねしろ考古』第3号
- 63 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)』
- 64 塚原正典「配石遺構」『考古学ライブラリー49』ニュー・サイエンス社
- 昭和63年(1988年)**
- 65 本間 宏「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』第4号
- 66 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(4)』
- 平成元年(1989年)**
- 67 石井 寛「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』第6冊港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 68 秋元信夫「環状列石と建物跡」『よねしろ考古』第6号
- 69 佐々木彰「縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について
—東北地方北上川中流域を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室紀要』7号
- 70 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(5)』
- 平成 2年(1990年)**
- 71 鎌田健一「有史時代に降った十和田火山起源の火山灰について」よねしろ考古第6号
- 72 成田紀彦「大湯環状列石周辺遺跡の古環境」『よねしろ考古』第6号
- 73 秋元信夫「環状列石と建物跡」『よねしろ考古』第6号
- 74 藤井安正「大湯環状列石周辺遺跡の配石遺構群について」『よねしろ考古』第6号
- 75 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(6)』
- 平成 3年(1991年)**
- 76 林 謙作「大湯環状列石の配石墓(1)」『よねしろ考古』第7号
- 77 渡辺清志「墓標考—配石墓について—」『遡航』第9号
- 78 鹿角市教育委員会『大湯環状列石発掘調査報告書(7)』
- 平成 4年(1992年)**
- 79 秋元信夫「大湯環状列石—精神性を秘めた墓域—」『歴史読本9月号』新人物往来社
- 80 鹿角市教育委員会『大湯環状列石発掘調査報告書(8)』
- 81 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想』
- 平成 5年(1993年)**
- 82 小林達雄「縄文時代の集落」『季刊考古学44』雄山閣
- 83 富樫泰時「縄文集落の変遷」『季刊考古学44』雄山閣
- 84 山本暉久「竪穴住居の形態」『季刊考古学44』雄山閣
- 85 林 謙作「大湯環状列石の配石墓(2)」『よねしろ考古』第8号
- 86 小畑 巖「高屋館跡の環状列石」『よねしろ考古』第8号
- 87 水野正好「《講演》ストーンサークルの謎」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号
- 88 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)』
- 平成 6年(1994年)**
- 89 佐々木勝「岩手県における縄文時代の掘立柱建物について」『岩手県博物館研究報告書』第12号
- 90 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(10)』
- 平成 7年(1995年)**
- 91 小林達雄「縄文時代の自然の社会化」『季刊考古学 別冊6』雄山閣
- 92 富樫泰時「秋田県大湯遺跡」『縄文時代における自然の社会化』雄山閣
- 93 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(11)』
- 94 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石環境整備基本計画』
- 平成 8年(1996年)**
- 95 小林達雄「縄文人の世界」朝日選書557 朝日新聞社
- 96 古屋敷則雄「環状土坑群・列石の方位と配置の規則性について」『動物考古』第6号

- 97 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（12）』
- 平成 9年(1997年)**
- 98 岡村道雄「ここまでわかった日本の先史時代」角川書店
- 99 小林 克「東北地方北部縄文時代の葬制」『考古学ジャーナル』422ニュー・サイエンス社
- 100 秋元信夫・藤井安正・花海義人「遺跡は語るNo21～36」さきがけ新報社
- 101 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（13）』
- 102 秋元信夫「大湯環状列石」『日本考古学協会1997年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
- 103 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編『縄文時代の集落と環状列石』
- 104 林 謙作「縄文社会の資源利用・土地利用-「縄文都市論」批判-」『考古学研究』第44巻第3号
- 105 渡辺清志「東北地方北半における配石墓の成立と展開（上）」『古代文化』第49巻第2号
- 106 渡辺清志「東北地方北半における配石墓の成立と展開（下）」『古代文化』第49巻第3号
- 平成10年(1998年)**
- 107 小林達雄他「縄文時代の考古学」学生社
- 108 浅川滋男編「先史日本の住居とその周辺」『奈良国立文化財研究所シンポジウム』同成社
- 109 阿部昭典「縄文時代の環状列石-新潟県中魚沼郡津南町道尻手遺跡
・堂平遺跡を中心として-」『新潟考古学談話会会報』第18号
- 110 くにとち郷土文化館『企画展 甲野勇の軌跡』
- 111 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（14）』
- 112 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石環境整備基本設計説明書』
- 平成11年(1999年)**
- 113 秋元信夫「縄文人の思惟と自然-東北の環状列石を中心に-」『ブナ林の民俗』高志書院
- 114 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（15）』
- 115 柳沢兌衛『東アジアの古代文化99号』大和書房
- 116 阿部義平『シリーズ日本のなかの考古学 蝦夷と倭人』青木書店
- 117 成田滋彦「目立たない土偶-第I章-」
『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(3)』勉誠社
- 118 小林達雄『縄文人の文化力』新書館
- 平成12年(2000年)**
- 119 秋元信夫「大湯環状列石のここがみどころ」
『全国訪ねてみたい古代遺跡100』成美堂出版
- 120 秋元信夫「大湯環状列石における遺跡の変遷」『青森県考古学』第12号 41～46頁
- 121 山本暉久「外縁部の柄鏡形（敷石）住居」『縄文時代』第11号
- 122 阿部昭典「縄文時代中期末は～後期前葉の変動」「物質文化」第69号
- 123 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（16）』
- 平成13年(2001年)**
- 124 林 謙作「大湯環状列石の配石墓」『縄文社会の考古学』同成社
- 125 鈴木克彦『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 126 小島朋夏「秋田県における縄文集落の諸様相」
『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 127 佐々木藤雄「環状列石と地域共同体」『異貌』19
- 128 小久保拓也編・児玉大成「縄文後期前半の岩版類と大型配石遺構」『渡島半島の考古学』
- 129 小杉 康「巨石記念物の謎を探る」『新北海道の古代1級石器・縄文時代』北海道新聞社
- 130 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（17）』
- 平成14年(2002年)**
- 131 葛西 勵『再葬土器棺墓の研究』「再葬土器棺墓の研究」刊行会
- 132 小林達雄編『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン機構
- 133 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（18）』
- 平成15年(2003年)**
- 134 石井 寛「東北地方における礫石附帯施設を有する住居址とその評価」『縄文時代』第14号
- 136 佐々木藤雄「環状列石と縄文式階層社会」『縄文社会論（下）』同成社、
- 137 藤井安正「特別史跡大湯環状列石の保存と活用」『日本歴史』第661号
- 138 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（19）』
- 平成16年(2004年)**
- 139 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（20）』
- 140 富樫泰時「秋田だより」『考古学研究』第51巻第1号（通巻201号）
- 141 富樫泰時「掘立柱建物考（縄文時代）-秋田県の例を中心に-」
『秋田県立博物館研究紀要』第28号
- 142 塩谷順耳「秋大史学創刊のころ」さきがけ新報社
- 143 大湯ストーンサークル館『大湯ストーンサークル館 展示図録』
- 144 藤井安正他『秋田の史跡・考古』秋田県教育委員会
- 145 秋元信夫「環状列石の周辺」『月刊文化財』2月号
- 146 岡田康博「北の環状列石」『月刊文化財』2月号
- 147 児玉大成「環状列石に見る縄文時代の土木技術」『月刊文化財』2月号
- 148 Tatsuo Kobayashi Jomon Reflection oxbow books
- 149 阿部昭典「縄文時代の環状列石について-環状列石の機能とその出現の意義-」
『東アジアにおける新石器文化と日本I』國學院大學21世紀COEプログラム
- 平成17年(2005年)**
- 150 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（21）』
- 151 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石(I) 遺構編』
- 152 小林達雄編『縄文ランドスケープ』アム・プロモーション

- 153 藤井安正「遺跡発掘リポート2005」さきがけ新報社
- 154 秋元信夫『石にこめた縄文人の祈り 大湯環状列石』 新泉社
- 155 秋元信夫「秋田県大湯環状列石」『縄文ランドスケープ』(株)アム・プロモーション
- 156 佐々木藤雄「環状列石初源考(上)」(『長野県考古学会誌』109号 1~18頁
- 157 松本直子『縄文のムラと社会』 岩波書店
- 158 古屋敷則雄「環状列石の設計図を求めて」『北奥の考古学』
葛西励先生還暦記念論文集刊行会

平成18年(2006年)

- 159 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(22)』
- 160 斎藤 忠『大湯環状列石は語る』 よねしろ考古学研究会
- 161 小林達雄「縄文時代の記念物」『NPO法人国際縄文学協会紀要』第2号
- 162 榎本剛治「環状列石における第二の道具の基礎的研究」
『第4回土偶研究会発表資料』土偶研究会
- 163 安中市ふるさと学習館編『ストーンサークル出現-縄文人の心、環の思想-』
- 164 葛西 勵『続・再葬土器棺墓の研究』「再葬土器棺墓の研究」刊行会
- 165 佐々木藤雄「環状列石から探る縄文式階層社会」『NPO法人国際縄文学協会紀要』第2号
- 166 藤井安正「大湯環状列石」『北秋田市縄文シンポジウム記録第1集
北東北・北海道の環状列石-4000年前の原風景を求めて-』
北秋田市教育委員会 34~41頁
- 167 宮尾 亨「環状列石の構造」『ストーンサークル出現-縄文人の心、環の思想-』
安中市ふるさと学習館

平成19年(2007年)

- 168 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(23)』
- 169 小林達雄編『考古学ハンドブック』新書館
- 170 鈴木克彦「日本のストーン・サークル眺望」
『季刊考古学』第101号 ニュー・サイエンス社
- 171 鈴木克彦「北日本総論」『季刊考古学』第101号 雄山閣
- 172 武藤祐浩「北日本のストーン・サークル 秋田県の諸遺跡」
『季刊考古学』第101号 雄山閣
- 173 金関 恕・岡村道雄・早川和子・藤井安正『よみがえる日本の古代』小学館
- 174 宮尾 亨「環状列石の造営」『縄文時代の考古学11心と信仰 宗教的観念と社会秩序』
同成社
- 175 小林 克「環状列石(東北・北海道地方)」『縄文時代の考古学II』小杉康ほか編 同成舎
- 176 児玉大成「雪と環状列石」(『青森県考古学』第15号
- 177 佐々木藤雄「環状列石初源考(下)」(『長野県考古学会誌』
- 178 成田滋彦「十腰内文化概説」『三浦圭介華甲記念考古論集』
三浦圭介華甲記念考古論集刊行委員会

平成20年(2008年)

- 179 斎藤 忠「大湯ストーンサークルの調査」
『斎藤忠著作選集 続2 日本考古学の課題』 雄山閣
- 180 小林達雄『縄文人追跡』 ちくま書房
- 181 小林達雄『縄文の思考』 ちくま書房
- 182 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(24)』
- 183 インテリジェント・リンク『世界遺産をめざす15遺跡 縄文遺跡ガイド』
- 184 石井 寛「掘立柱建物跡からみた後晩期集落址」『縄文時代』第19号
- 185 藤井安正「大湯環状列石」『決定版 日本の古墳・古代遺跡』学習研究社
- 186 阿部昭典『縄文時代の社会変動論』(未完成考古学叢書⑥)アム・プロモーション
- 187 佐々木藤雄「列石と配石、階層と不平等『日本のストーンサークル』を批判する」
『異貌』第26号
- 188 佐々木藤雄「東北の環状列石」『季刊東北学』

平成21年(2009年)

- 189 榎本剛治「米代川流域における集落遺跡と環状列石について」
『月刊考古学ジャーナル』No584
- 190 石井 寛「周石型礫石施設の系譜と性格」『縄文時代』第20号
- 191 鹿角市教育委員会『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(25)』
- 192 鈴木克彦「東北地方の縄文集落の社会組織と村落」
『シリーズ縄文集落の多様性I 集落の変遷と地域性』雄山閣
- 193 成田滋彦「大湯環状列石の土偶・土製品」
『竹石健二先生・澤田大多郎先生記念論文集』六一書房

平成22年(2010年)

- 194 榎本剛治「環状列石と掘立柱建物跡」『異貌』27号
- 195 小林 克「環状列石と建物遺構」『比較考古学の新地平』同成社
- 196 佐々木藤雄「環状列石外縁の掘立柱建物群」『異貌』27号
- 197 阿部昭典「環状列石における「第二の道具」」
『縄文時代の精神文化 第11回研究集会発表要旨集・資料集』関西縄文文化研究会
- 198 阿部昭典「縄文時代後期前葉における土偶の有脚化とその意義」
『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号
- 199 阿部昭典「東北地方北部における石刀の顕在化」『國學院大學考古学資料館紀要』第26号
- 200 阿部昭典「縄文時代の鐔形土製品に関する一考察」『相山林継先生古希記念論集』雄山閣
- 201 藤井安正「大湯環状列石」『世界遺産縄文遺跡』同成社

平成23年(2011年)

- 202 中村 大「祭祀考古学における多変量解析とGISの活用 秋田県米代川流域の縄文時代
資料を例として」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要第3号』
國學院大學研究開発機構伝統文化リサーチセンター
- 203 宮尾 亨「記念物としての配石-縄文時代の配石遺構-」『月刊考古学ジャーナル』No. 612
- 204 阿部昭典「東北北部における環状列石の受容と集落構造」『古代文化』第63巻第1号
- 205 阿部昭典「土偶有脚化とその意義」『第8回土偶研究会岩手県大会資料』土偶研究会
- 206 阿部昭典・國木田大・吉田邦夫「縄文時代の鐔形土製品の自然科学分析」
- 207 日本考古学協会編『日本考古学協会第77回総会研究発表要旨』日本考古学協会

平成24年(2012年)

- 208 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
『平成24年度秋季企画展図録 縄文のストーンサークル』
- 209 中村 大・阿部昭典・加藤元康「祭祀考古学のデータモデルと解析」
『伝統文化リサーチセンター総括論集』國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 210 阿部昭典「縄文時代の心の考古学-景観論と「第二の道具論」
「祭祀儀礼と景観の考古学」 国学院大学伝統文化リサーチセンター

平成25年(2013年)

- 211 小林達雄監修『別冊太陽 縄文の力』平凡社
- 212 小林達雄「縄文人のインテリジェンス」『別冊太陽 縄文の力』平凡社
- 213 小杉 康「大規模記念物と北海道縄文後期の地域社会について（予察）」
『北海道考古学』第49輯
- 214 小林 克「東北地方の環状列石」『事典墓の考古学』土生田純之編 吉川光文堂
- 215 藤井安正「大湯環状列石」『別冊太陽 縄文の力』平凡社

平成26年(2014年)

- 216 熊谷常正・児玉大成・武藤祐浩「東北地方北部の縄文集落の信仰・祭祀」
『シリーズ縄文集落の多様性IV 信仰・祭祀』雄山閣
- 217 小杉 康「葬墓祭祀と大規模記念物」『講座日本の考古学4縄文時代（下）』青木書店
- 218 阿部昭典「東北北部における縄文後期社会と環状列石」
『図録 縄文！-岩手10000年のたび-』大阪府立弥生博物館

平成27年(2015年)

- 219 設楽博巳「縄文時代の再葬墓と弥生再葬墓」『季刊考古学第』130号 雄山閣
- 220 岡村道雄『別冊宝島 縄文の世界』宝島社
- 221 中村 大「数字で読みとく土偶と環状列石-定量的分析の可能性-」
『津軽海峡圏の縄文文化』雄山閣
- 222 阿部昭典『縄文の儀器と世界観』知泉書館
- 223 藤井安正「環状列石の石材保存について」
『平成27年度東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要』

追記

明治19年(1887年)

- 224 渡瀬莊三郎「北海道後志国に存する環状石籬の遺跡」『人類学会報告』第2号

大正8年(1919年)

- 225 長谷部言人「陸前国細浦上の山貝塚の環状列石」『人類学雑誌』第34巻第2号

昭和42年(1967年)

- 232 奈良修ほか『秋田県の考古学』吉川弘文館

昭和44年(1969年)

- 226 藤本英夫・奥山潤『小坂環状列石墳墓』小坂町教育委員会

昭和60年(1985年)

- 227 齋藤長八「大湯環状列石昭和6年発見説を駁す」『よねしろ考古』第1号

平成5年(1993年)

- 228 高橋忠彦「米代川流域の三脚石器」『よねしろ考古』第8号
- 229 小畑 巖「高屋館跡の環状列石」『よねしろ考古』第8号

平成2年(2002年)

- 236 田中琢、佐原真『日本考古学事典』三省堂

平成9年(2009年)

- 230 石井 寛「総論：縄文後期集落の変遷と特質」『月刊 考古学ジャーナル』No.584
- 231 榎本剛治「米代川流域における集落遺跡と環状列石について」『月刊 考古学ジャーナル』No.584

平成16年(2004年)

- 232 藤原 明『日本の偽書』文春新書

平成20年(2008年)

- 233 榎本剛治「十腰内Ⅰ式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 234 鈴木克彦「宝ヶ峯式・手稲式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 235 秋田かな子「加曾利B式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会



昭和17年神代文化研究所(左から安村広治、多田井四郎治、浅井小魚、諏訪富多、諏訪みつこ)
写真裏に、昭和17年、四角岳登山記念に撮影したことが記載されている。敬称略)



昭和21年調査区第二地割



昭和21年調査区第二地割



昭和21年調査区第二地割土器出土状況



昭和21年調査風景



昭和21年調査風景



昭和21年万座日時計状組石

PL14 神代文化研究所・昭和21年調査風景(1)



昭和21年調査風景



昭和21年調査風景



昭和21年調査区第二地割



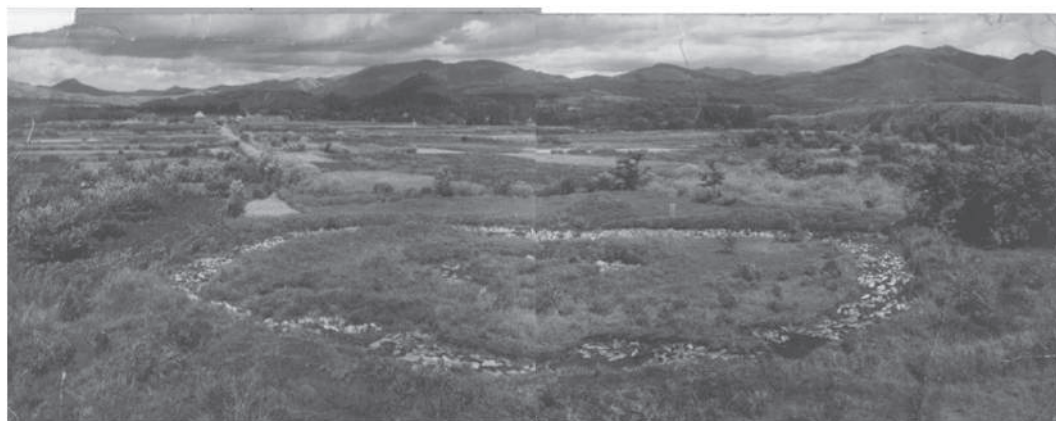
昭和21年調査風景



昭和21年調査風景



国営調査担当者



万座環状列石全景(昭和26年・27年)

PL15 昭和21年調査風景(2)、国営調査担当者



万座日時計状組石



万座外帯2号配石



万座外帯4号配石



万座外帯8号配石



万座外帯9号配石



万座外帯12号配石



万座外帯13号配石



万座外帯14号配石



万座外帯16号配石



万座外帯21号配石

PL16 昭和26年・27年国営調査(1)



万座外帯22号配石



万座外帯23号配石



万座外帯24号配石



万座外帯25号配石



万座外帯26号配石



万座外帯34号配石



万座外帯35号配石



万座外帯40号配石



万座外帯41号配石



万座外帯45号配石

PL17 昭和26年・27年国営調査(2)



万座外帯(東側)



万座外帯(東側)



野中堂環状列石全景(昭和26年・27年)



野中堂環状列石内帯



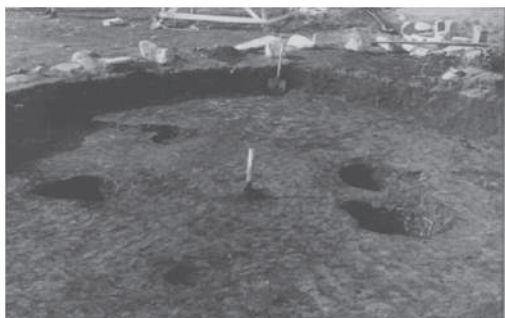
野中堂環状列石内帯の掘り下げ



野中堂の日時計状組石



野中堂内帯(東側)



野中堂内帯内の調査(柱穴状ビット)



野中堂内帯1号配石

PL18 昭和26年・27年国営調査(3)



野中堂内帯3号配石



野中堂内帯5号配石



野中堂内帯6号配石



野中堂外帯11号配石



野中堂外帯20号配石



野中堂外帯42号配石



調査風景1(国営調査)



調査風景2(国営調査)



調査風景3(国営調査)



調査風景4(国営調査)



調査風景5(国営調査)



調査風景6(国営調査)



調査風景7(国営調査)



調査風景8(国営調査)



調査風景9(国営調査)



調査風景10(国営調査)



調査風景11(国営調査)



史跡仮指定看板



中通遺蹟の石碑



出土土器

PL20 昭和26年・27年国営調査(5)



昭和30年当時の野中堂環状列石



昭和30年当時の野中堂環状列石



昭和40年当時の万座環状列石



昭和40年当時の万座環状列石



昭和40年当時の万座環状列石



昭和40年当時の万座環状列石(日時計)



昭和40年当時の万座環状列石



昭和40年当時の
野中堂環状列石内帯



昭和40年当時の野中堂環状列石外帯

PL21 昭和30年～40年代の遺跡の様子(1)



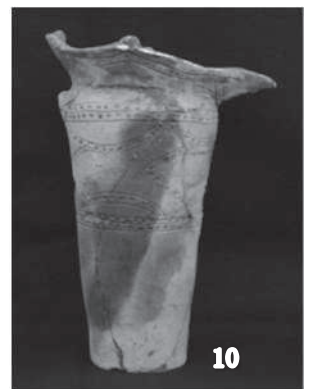
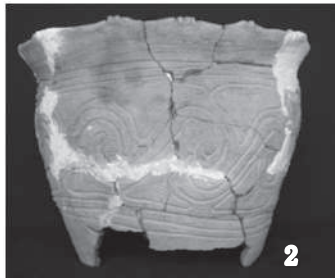
万座外帯配石



万座外帯配石

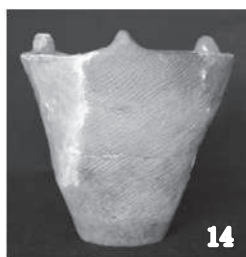


昭和40年当時の野中堂環状列石南側



昭和21年甲野調査、同26年・27年国営調査出土土器

PL22 昭和30年～40年代の遺跡の様子(2)、昭和21年、国営調査出土土器(1)



昭和21年甲野調査、同26年・27年国営調査出土土器



環境整備途中の大湯環状列石(北側から俯瞰)



野中堂環状列石



万座環状列石

PL23 昭和21年・国営調査出土土器(2)、環境整備された遺跡(1)



大湯環状列石(真上写真)



掘立柱建物跡(復元)



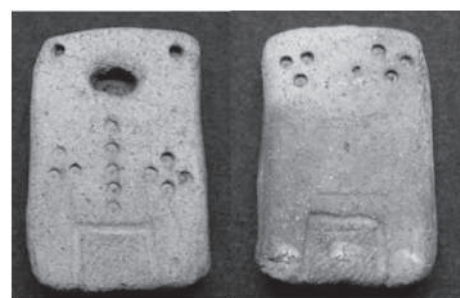
日時計状組石(野中堂)



環状配石遺構



代表的な土器



土版(表・裏)



代表的な土製品・石製品



大湯ストーンサークル館

PL24 環境整備された遺跡(2)、代表的な出土遺物、大湯ストーンサークル館



野中堂内帯石列(内帯17号・D1類)



野中堂外帯の石列(外帯55号・D2類)



野中堂外帯の石列(外帯57号・D2類)



野中堂外帯の石列(外帯56号・D2類)



万座内帯の石列(114号・D4類)



万座内帯と外帯を繋ぐ石列(115号・D5類)



万座外帯の石列(129号・D2類)

PL25 環状列石内の石列

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせき おおゆかんじょうれついし そうかつほうこくしよ							
書 名	特別史跡 大湯環状列石 総括報告書							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料							
シリーズ番号	110 集							
編著者名	鹿角市教育委員会(生涯学習課 藤井安正、赤坂朋美、工藤 海)							
編集機関	鹿角市教育委員会							
所 在 地	〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田 4 番地 1							
発行年月日	平成 29 年 3 月 24 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大湯環状列石	秋田県鹿角市 十和田大湯 字万座、 字野中堂、 字一本木後口	05209	123	40 度 16 分 20 秒	140 度 48 分 49 秒	鹿角市教育委員会 (文化財保護委員会、秋田県教育委員会、大湯郷土研究会、神代文化研究所)		学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
大湯環状列石	環状列石	縄文時代(後期) 平安時代 江戸時代		<縄文時代> 環状列石 環状・方形配石遺構 配石遺構 石列 掘立柱建物跡 竪穴住居跡 土坑 フラスコ状土坑 その他 <平安時代> 竪穴住居跡 土坑 古墳 <江戸時代> 道路跡		<縄文時代> 縄文土器 (後期前葉～中葉) 石器 土製品 石製品 炭化堅果類 <弥生時代> 弥生土器 <平安時代> 土師器 須恵器 鉄製品	本報告書は遺跡の発見からこれまでの調査成果を総括したものである。	

鹿角市文化財調査資料第 110 集

特別史跡大湯環状列石総括報告書

発行年月日 平成 29 年 3 月 24 日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田 4 番地 1

☎0186-30-0294(生涯学習課)
